

では惣領村であるが、高方の書類には先年から深見惣領と記すというてゐる。

ソウリヨウ 宗令 ↓ダイテツソウリヨウ 大徹宗令。

ソウリン 宗麟 ↓ドクカクソウリン 獨角宗麟。

ソウリンジ 宗林寺 金澤高岡町下敷内に在つて、眞宗西派に属する。初め五寶町に在り、次いで仙石町に轉じ、明治廿一年今の地に移つた。

ソウワリユウ 宗和流 金森宗和重近の創めた茶道の一派。寛永二年その子七之助方氏前田利常に來仕したが、明暦二年宗和の歿後宗和流の家元となり、子孫平藏方一・内匠信近・多門知近・猪之助成章・量之助知直これを傳へた。文化四年知直自及し、家元は多賀直昌號宗乘、南部宗右衛門號宗右、九里步號一蓬に順次傳へる所となつた。

ソエン 祖縁 ↓ベツソウソエン 別宗祖縁。

ソカン 祖閑 祖閑は金澤如來寺の一廂で、塔頭に坊舎を營み、その結構善美を盡くしたが、一夜人の爲に誘殺せられた。これ小將組番頭吉田頼母の家臣林藤左衛門が如來寺の旦那で、その妻が祖閑と密通したのを知つて怨を報じたので、後に妻をも同所に伴ひて殺害し、己は藩外に脱走した。元和九年の事である。

ソカン 祖環 ↓ムタンソカン 無端祖環。

ソギヨ 曾魚 ↓タニヤソギヨ 谷屋曾魚。

ソキン 素析 ↓エツガンソキン 悅巖素析。

ソクエンシユウキホウ 測圓周規法 文化

十二年石黒信由の著。不動點を發見し、楕圓周を追跡することを説いたもの。不動點は焦點のことであるが、この法を發見したものは信由を鼻祖とするらしい。

ソクエンシユウハイシンジユツ 側圓周背眞術 文化四年石黒信由の著した算書。楕圓の周圍の長さを求める術を述べたものである。

ソクエンヨウジュツ 測遠要術 五冊。石黒信由の著に係るもので、測量法を述べたものである。

ソクオウジ 即往寺 羽咋郡大津に在つて、眞宗東派に属する。

ソクガンジ 即願寺 金澤木町に在つて、眞宗東派に属する。初め中町に居たが、寛文元年今の所に移つたといふ。

ソクキユウコホクチヨウロク 續汲古北微錄 二冊。森田平次編。古文書の影寫蒐集であり、承久三年九月注進能登國四郡庄郷保公田田數目錄その他を載せる。書名は富田景周の汲古北微錄に據る。

ソクコウシユウ 續香集 一冊。横山致堂の續室蘭曉の詩集である。詩佛の序に天保五年甲午初春とあつて、同年以上梓せられた。

ソクシチブシユウ 續七部集 ↓ハイカイゾクシチブシユウ 俳諧續七部集。

ソクジヨウイン 速成院 加賀藩主第十三代前田齊泰の子亮午郎、後に越中善徳寺亮麿の法號。詳しくは速成院釋達亮。

ソクシヨウジ 即證寺 能美郡小松に在つて、眞宗東派に属する。

ソクシヨウジ 即生寺 河北郡内高松に在つて、眞宗東派に属する。

ソクシンハイ 測晷牌 文政二年遠藤高塚の考案製造に係り、太陽を覗いて時刻を測る器械である。

ソクゼントクザツキ 續漸得雜記 ↓ゼントクザツキ 漸得雜記。

ソクゾクゼントクザツキ 續々漸得雜記 ↓ゼントクザツキ 漸得雜記。

ソクタクキン 囑託金 島原の亂後、寛永十五年九月幕府は初めて囑託金の制を定め、伴天連の訴人に銀二百枚、伊留藩の訴人に銀百枚、切支丹の訴人に銀五十枚若しくは三十枚を與へることにし、全國の宿驛等に高札を立てしめた。因つて加賀藩は、幕府の囑託金以外、別に伴天連の訴人に金子拾枚、伊留藩の訴人に金子五枚、切支丹の訴人に金子三枚の副賞金を附した。これ等の制札の掲げられる所を囑託場といひ、藩はこゝに大判拾枚を懸けて之を告發者に與へることを示した。但し享保頃にはこの大判に模型を用ひてあつた。囑託の語は袁氏世範に、『胥吏に囑託し官吏に賄賂する奸惡の訴人を求めん爲に黄金を込に掛く。』とある如き所から出たのであらう。

ソクタクバ 囑託場 ↓ゾクタクキン 囑託金。

ソクトクジ 即得寺 能美郡寺井にあつて、眞宗東派に属する。初め小松に居たが、天和中今の所に移つたといふ。

ソクハナシズイヒツ 續咄隨筆 ↓ハナシズイヒツ 咄隨筆。

ソクハハソハラシユウ 續柞原集 二冊。金澤の俳人馬佛編。文化元年關吏の七年忌追悼の爲に作つた發句集である。享和三年仲冬

遊池齋主人序、阿青が祭先師關吏文、享和三年冬十月賀州嚴赫之尹明の序、甲子のとし馬佛の後序などがある。京勝田喜右衛門・勝田善助板。

ソクミナシグリスユウ 續虛粟集 堀麥水の三州奇談に『七尾の大野氏なる人は、元祿の頃の主人を併名長久といへり。續虛粟集を撰びし人にて、好事世々に傳ふと云。』とあるが、その書は現在存するや否や明らかでない。

ソクミヨウジ 即明寺 金澤彦三町に在つて、眞宗東派に属する。初め羽咋郡小川村に居たが、明治元年金澤荒町に轉じ、十三年今の地に移つた。

ソクリヨウ 測量 (一)町見術—測量の法は城碧溝渠橋梁の築造又は開墾の土功等に缺くべからざるものであつたが、古來支那海島算經の遺法に算法を加味し、町見術とも地理とも稱してゐた。而して加越能に於いて明らかに町見術の名稱を以て行はれるに至つたのは、もと江戸の書肆であつた藤井半知が越中富山に移り、自ら圖翁遠近道印と號してその術を説いたに起り、半知は之を金澤の有澤永貞に、永貞は有澤武貞及び致貞に、武貞は之を有澤貞幹に、貞幹は富山の安達彌亮に、彌亮は之を安達淳直に傳へた。藤井半知の時代は明瞭でないが、その元祿以前に在ることは勿論である。蓋し寛永の頃長崎の人樋口權右衛門根發術を關人から受け、町見術に改良を加へたが、半知も亦この法を承けた如く、圖上の距離を量るに根發を用ひたのである。

(二)測遠術—前記樋口權右衛門の門下に山崎兵太夫があり、その流を山崎流測遠術と稱した。この流の傳統は山崎兵太夫・山田定行・田